

<資料論文>

高等学校における国語科漢詩単元の「充実した学び」を提供する授業実践  
—大学生を対象とした「韻を踏んだ訳詩の創作」の模擬授業を手掛かりに—

大貫 眞弘

(ドルトン東京学園中等部・高等部)

Lesson Practice to Provide "Enrichment Learning" in the Unit of Chinese Poetry in  
Japanese Language Course at Senior High School:  
Using a mock class for university students on "Creating Rhyming Poems in  
Translation" as a guide

Masahiro Onuki

Dalton Tokyo Junior and Senior High School

キーワード：高等学校，国語科，漢詩，訳詩の創作，充実した学び

KEYWORDS: senior high school, Japanese language course, Chinese poetry, creating  
poems in translation, enrichment learning.

### 抄録

国語科教科書では小・中・高の校種を跨いで教科書に掲載されている漢詩があり，その場合は小学校よりも中学校，中学校よりも高校で，如何にして学習者により充実した学びを提供できるかが問われることとなる。その中で高校教科書の漢詩単元に掲載されている，訳詩・翻案詩の創作を取り入れた言語活動により充実した学びを実践する可能性を見いだした。この言語活動は60年以上も前から今日に至るまで教科書に掲載され続けているにも関わらず，先行実践の記録も，学習者の創作事例も残されていない。そのため，本稿では授業実践によって学習者の創作物を収集し，創作過程などについて学習者にインタビューを行うことによって，充実した学びを実践するための観点を得ることとした。教職課程科目を履修する大学生を対象とした訳詩創作の模擬授業とその後のインタビューを通じて，

本単元を高校生対象として実践を行うにあたっての留意点を得ることができた。

### 1. 研究の背景

2008年に告示され，2011年に完全施行された国語科学習指導要領では「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され，古典に親しむ態度の育成が重視された。2017年に告示され，2020年度から順次施行されている学習指導要領でも，「我が国の言語文化に関する事項」とし

て継承されている。一方で、古典教育はそれ自体の必要性がかねてから問われ続けている。「古典は本当に必要なのか」というシンポジウムが行われ（勝又，2019），ネット上でも活発に議論が行われている。

とりわけ、本稿で取り上げる漢詩教材は、充実した学びの実現を具体的に問われる場に晒されている。それは、小学校、中学校、高等学校の国語教科書には、校種を跨いで同じ漢詩が教材として掲載されているためである。その状況を表1としてまとめた。「春暁」と「静夜思」の二編は小・中・高の三校種の教科書に掲載され、「春望」「黄鶴楼送孟浩然之広陵」「絶句」の三編が中・高の二校種の教科書に掲載されている。小学校よりも中学校，中学校よりも高校で，如何にして学習者により充実した学びを提供できるかが問われている。

この背景のもと，本稿では，まず小・中・高の各教科書における漢詩教材に記された学習内容の把握を行う。次いで，高校段階における漢詩の授業実践に焦点を当て，一試案を用いて大学における教職課程科目「国語科教育法」で学生を相手に授業実践を行い，授業後にインタビューを行うことを通してデータを収集し考察を行い，充実した学びにつながる高等学校段階における漢詩の授業実践の検討を行うこととしたい。

表1 小学校「国語」(2020年度から使用)，中学校「国語」(2021年度から使用)，高等学校「言語文化」教科書(2022年度から使用)掲載の漢詩のうち，校種を跨いで掲載されている漢詩の一覧

No.	作品名	作者名	小学校「国語」教科書の掲載数 (全4社・4種中) *出版社略称の前の丸数字は掲載学年。	中学校「国語」教科書の掲載数 (全4社・4種中) *出版社略称の前の丸数字は掲載学年。	高等学校「言語文化」教科書の掲載数(全9社・17種中) *出版社略称の後の数字は教科書の種類数。なお、「全9社・17種」の内訳は次の通り。 【東書2種・三省2種・大修2種・数研3種・文英堂1種・明治1種・筑摩1種・第一4種・桐原1種】
1	春暁	孟浩然	3(⑥東書・⑤教出・⑤光村)	4(③教出・②東書・②三省・②光村)	10(東書2種・三省1種・大修1種・数研1種・明治1種・第一4種)
2	静夜思	李白	1(⑤教出)	1(③光村)	12(三省2種・大修2種・数研2種・文英堂1種・明治1種・第一4種)
3	春望	杜甫		4(③教出・②東書・②三省・②光村)	11(東書2種・三省1種・大修1種・数研1種・文英堂1種・明治1種・第一4種)
4	黄鶴楼送孟浩然之広陵	李白		4(③教出・②東書・②三省・②光村)	4(東書2種・第一2種)
5	絶句	杜甫		1(②光村)	1(桐原1種)

出版社略称：東書＝東京書籍，教出＝教育出版，光村＝光村図書出版，三省＝三省堂，大修＝大修館書店，数研＝数研出版，明治＝明治書院，筑摩＝筑摩書房，第一＝第一学習社，桐原＝桐原書店。(文英堂はそのまま正式名称)

## 2. 教科書の現状と本稿の目的

本節では小・中・高の教科書から「春暁」が収録されている1社ずつを選び、それぞれの教科書会社が発行する年間指導計画資料漢詩単元の学習内容が記述されている部分を引用し、校種の段階ごとの学習内容を把握することとする。

表2からは、小学校段階では「音読」を行い、「言葉の響き」「言い回し」「リズム」に「親しむ」という学習活動が中心に行われることが読み取れる。中学校段階でも

「リズム」という表現は使われる。また、小学校段階では「親しむ」と書かれていたものが中学校段階では「読み味わう」という表現に変わっている。さらに、「構成」「表現の効果」といった読みの観点や、「状況」「情景」「心情」「想像」という学習の観点が新

たに加わる。高等学校段階でも、小・中学校段階で既出の表現（傍線部）が多く見られる。

これらの既習事項を高等学校段階でも授業として行う場合には、小・中学校段階との違いを意識して行うなど特段の注意を払わない限り、高等学校段階における漢詩の学習は、「漢詩の形式」「詩形・押韻」（二重傍線部）という、学習者にとっては暗記事項が多く深みのない授業に終始するおそれがある。そのため、小・中学校では行われなかった充実した学びを学習者に提供できるよう一層の配慮が求められることになる。

表2 小・中・高教科書の「春暁」を含む漢文（漢詩）単元の学習内容（傍線は稿者による）

<p>【東書・小6「漢文に親しむ」の単元指導計画】〈単元の目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漢文を音読し、<u>言葉の響きやリズムなどに親しむ</u>ことができる。</li> </ul> <p>〈言語活動〉漢文を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめる。</p> <p>〈主な学習活動〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 漢文を音読し、その<u>言葉の響きやリズムに親しむ</u>という学習課題を確かめる。</li> <li>2 教科書に取り上げられている漢文を音読し、漢文について知る。</li> <li>3 好きな漢文を一つ選び、選んだ理由や気に入っているところを文章にまとめる。</li> <li>4 漢文の<u>言葉の響きやリズム</u>について、学習したことを振り返る。</li> </ol> <p>（東京書籍，2020）</p>	<p>【三省・中2「漢詩の世界」の単元指導計画】</p> <p>〈学習目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漢詩の<u>表現やリズム</u>を捉え、<u>読みを味わう</u>。</li> <li>・漢詩に描かれた<u>情景</u>を捉え、古人の<u>心情</u>を想像する。</li> </ul> <p>〈主な学習活動〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 漢詩の<u>表現やリズム</u>を捉え、<u>読み味わう</u>。</li> <li>・語句の意味や<u>構成</u>などに注意して音読する。</li> <li>・漢詩の形式について確認する。</li> <li>2 作者の<u>状況</u>を捉え、<u>心情</u>を想像する。</li> <li>・「春暁」について、作者の<u>状況</u>を捉え、<u>心情</u>を想像する。</li> <li>・「黄鶴楼にて…」について、作者の<u>状況</u>を捉え、<u>心情</u>を想像する。</li> <li>・「春望」について、作者の<u>状況</u>を捉え、<u>心情</u>を想像する。</li> <li>3 描かれた<u>情景</u>を捉え、<u>表現の効果</u>を考える。</li> <li>・自然を表す<u>表現の効果</u>について考える。</li> <li>・考えたことを文章にまとめ、交流する。</li> </ol> <p>（三省堂，2021）</p>	<p>【東書・高校『新編国語総合』「2 唐詩」の学習内容】</p> <p>〈単元目標〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漢文を繰り返し音読し、優れた<u>表現</u>に親しもう。</li> <li>・漢詩にうたわれた<u>情景</u>や作者の<u>心情</u>を読み取ろう。</li> </ul> <p>〈学習の手引き〉</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 それぞれの詩にうたわれている<u>状況</u>はどのようなものか。</li> <li>2 それぞれの詩にうたわれている<u>心情</u>はどのようなものか。</li> <li>3 「<u>漢詩の形式ときまり</u>」を参考にして、それぞれの詩の<u>詩形・押韻</u>を確かめよう。</li> </ol> <p>（嶋中ら，2021a，pp.227-233）</p>
---	---	--

その中で注目されるのが、訳詩・翻案詩の創作を取り入れた言語活動である。この言語活動を掲載している教科書は小・中学校教科書になく、高校のみ2社、4種類の教科書に掲載されて

いる<sup>1)</sup>。この訳詩・翻案詩の創作の学習課題は新しいものではなく、例えば東京書籍『国語 高等学校二年下』（柳田ら、1954）、明治書院『漢文古典乙 I』（内田ら、1963a）、好学社『高等学校古典乙 I 漢文編』（加藤ら、1968a）などの教科書にも掲載され、今日に至っている。しかし、この類の学習活動に関する先行実践の記録や論考などは見当たらない<sup>2)</sup>。また、教科書指導書にも、学習者が作ると想定される訳詩の例は記されていない<sup>3)</sup>。そのため、この学習活動が実際にどれほど行われているのか、そして学習者が実際にどのような訳詩を作ることが想定されているのかといった点が不明である<sup>4)</sup>。

そこで、本稿では、60年以上も前から今日に至るまで教科書に掲載され続けており、高校における漢詩を扱った充実した学びにつながる可能性を孕んでいながらも解明されていない点の多い漢詩の訳詩・翻案詩の創作という言語活動について、授業実践によって学習者の創作物を収集し、創作過程などについて学習者にインタビューを行うことによって、充実した学びを实践するための観点を得ることを目的としたい。

### 3. 漢詩の訳詩作りの授業実践

漢詩の訳詩・翻案詩の創作の实践を行うにあたり、今回は大学の教職課程科目「国語科教育法」を履修する学生（履修者 5 人）を対象とした。その理由は、先行実践の記録や論考などがなく手探りの状態で高校生を対象としてこの实践を行い、学習者が困難さばかりを感じて学習を終えてしまった場合、その後の漢詩や漢文の学習を忌避してしまいかねないという懸念があるためである。その点、「国語科教育法」を履修する学生は、中学・高校国語科の教員免許の取得を目指すために国語科の全範囲に渡る学習が求められており、漢詩の学習もその中に含まれる。そして、もしも今回の学習に困難さを感じたとしても、その困難さを克服する工夫を考えること自体が「国語科教育法」としての学習になる。

今回の实践では、高校教科書で行われている「訳詩を作る」という課題に、「漢詩で韻が踏まれている行は、訳詩にも韻を踏む」という条件を付け加えることにした。この条件を付加したのは、以下の背景によるものである。

漢詩に現代語訳を施す作業を精確に行おうとするとその漢詩の背景的知識や想像力が求められ、容易なことではない。しかも、優れた訳文は参考書やインターネットで調べれば容易に入手可能で、学習者にとっては手間をかけたわりに得られる達成感は少ない。韻を踏まない訳詩についても多くの作品が世に出回っており、同じ条件の訳詩作りを課せられた場合には、敢えてそれらのもとは異なる訳詩を創作しなければならないという高いハードルが設定されることになる。その点、韻を踏んだ訳詩というのは管見の限りでは見当たらず、学習者にとっては新たな価値の創造という魅力がある。

そして、韻を踏んだ詩は、世界の諸言語によって行われている。漢詩の他にも、英語詩ではマザーグースのように脚韻を踏むことが基本となっている。日本ではコマーシャルのコピーやラッ

プミュージックの歌詞などによって脚韻を踏んだ言葉は身近なものであり、訳詩に韻を踏むという課題は学習者を混乱させるものにはならないと考えられる。

漢詩という脚韻を踏んだ韻文詩に対して脚韻を踏んだ韻文詩で訳するという作業は、日本語と中国語の言語文化の相互交流というダイナミズムを孕んだものでもあり、敢えて学生に挑戦させる価値が十分にあると判断した。

そこで、今回の訳詩作りの実践にあたって、学生には次の指示を行い、訳詩例を配付した。表3は、配付した訳詩の一部である。

表 3 学習者に示した訳詩例

<p>【「春暁」の訳詩例】 ねむたい朝のゆめごちち(松下緑訳) ねむたい朝のゆめごちちちゅんちゅん雀も鳴いている昨夜ひとばん雨風あれた花もよっぽど散つたろう (松下, 2006, p. 106)</p>	<p>春暁(井伏鱒二訳) ハルノネザメノウツツデ聞ケバトリノナクネデ目ガサメマシタヨルノアラシニ雨マジリ散ツタ木ノ花イカホドバカリ (井伏, 1994, p. 42)</p>	<p>春あけぼの(土岐善麿訳) 春あけぼののうすねむりまくらにかよふ鳥の声風まじりなる 夜べの雨花ちりけんか 庭もせに (土岐, 1985, p. 3)</p>	
<p>【「静夜思」の訳詩例】 つきぬ思いは 故郷のこと(松下訳) 霜かとまごう月あかり旅のまくらを照らすかなまどのむこうは山の月 つきぬ思いは故郷のこと (松下, 2006, p. 106)</p>	<p>静夜思(井伏鱒二訳) ネマノウチカラフト気ガツケバ霜カトオモフイイ月アカリノキバノ月ヲミルニツケザイショノコトガ気ニカカル (井伏, 1994, p. 49)</p>	<p>しづかなよる(横山訳) ねまのあたりに つきかげおちてふとみまちはうにわのしもかところべをあべてつきながむればこうべはたれてふるさとおもう (横山, 2019, p. 101)</p>	
<p>【「春望」の訳詩例】 都ハ焼カレテ(松下訳) 都ハ焼カレテ山河ハノコリ春ノチマタニ草木ハ萌エル花ノ咲クニモナミダハ流レ鳥ノワタリニ別レヲイタムヤヨイ三月イクサハ果テズマテド身内ノ便リハコナイカケバ白髪ハハラハラ落テマゲヲ結ウサエマナラヌ(松下, 2009, p. 20)</p>	<p>はるのながめ(横山訳) くにはくずれてやまかわのこりはるのまちは きやくさばかりときをうれいて ちりゆくはなよわかれにやんで なきたつとりよのろしはすでに みつきにわたりつまのたよりを ただまちわびるしらがあたまは かくほどぬけて もうまならぬ かんざしさえも(横山, 2019, p. 20)</p>		
<p>【韻を踏んだ訳詩例(稿者作成)】 春暁まだ眠い 春の朝<u>方</u>(aa) 鳥の声 耳にやわ<u>らか</u>(aa) 雨や風 夜中に過ぎてどれくらい 花が散つた<u>か</u>(aa)</p>	<p>春眠不覚曉処聞啼鳥夜来風雨声花落知多少</p>	<p>送元二使安西 さよならパーティー明け朝は (aaa) 空も木の葉も 晴れや<u>かだ</u>(aaa) 最後にタピオカ 飲み干そう行く 先さびしい <u>だけだから</u>(aaa)</p>	<p>渭城朝雨潤輕塵客舍青青柳色新勸君更盡一杯酒西出陽關無故人</p>

- ・漢詩はそれ自体が韻文ということもあり、今回は韻文訳を試みてみたい。訳詩にも多くの先例がある。(表3の「春暁」、「静夜思」、「春望」の訳詩例)

- ・漢詩には特定の行末に押韻がある。そこで、訳文にも韻を踏んでみることに挑戦してみよう。これも例を参照のこと。(表3の「韻を踏んだ訳詩例」)。
- ・韻文訳を試みる漢詩は、高校で学習する定番である「春暁」「静夜思」「送元二使安西」「春望」の4編。
- ・漢詩に忠実な訳でも、意識でもよい。場や情景など、自分なりに解釈して訳してもよい。
- ・調べたいことがあれば調べながら作業してもよい。韻を踏む言葉を見つけるためのツールとして、「ラップ作詞支援辞書」(野浪, 2006)を紹介する。大阪教育大学野浪正隆研究室ホームページで公開されている。
- ・①自力で取り組む(10分), ②グループで情報交換(10分), ③自力で取り組む(20分), ④グループで情報交換(10分), ⑤自力で取り組む(20分), 計70分の時間を取る。
- ・この時間内に作りきれなかった場合は, 3日後までにメールで提出すればよい。
- ・来週の授業で訳詩を読み合う。初めての試みなので作品の巧拙は気にせずのびのびと作ろう。

#### 4. 結果と考察 4.1 学習者が作成した訳詩

学習者は70分の作業時間と、授業3日後までの提出期間までに、一つの漢詩につき一つの訳詩を作り上げた。表4は、学習者が作成した訳詩の一部である。

表4 学習者が作成した訳詩

<p>【「春暁」の訳詩】訳詩① 春の眠りは まだ<u>覚めず</u>(aeu) あちらこちらで 鳥が鳴く朝は<u>天気</u> もう<u>晴れる</u>(aeu) 夜の<u>風雨</u>で <u>花</u><u>荒れ</u> <u>る</u>(aeu)</p>	<p>訳詩② 春の心地に 夢<u>うつ</u> <u>つ</u>(uuu) 鳥の鳴き声 身を<u>包</u> <u>む</u>(uuu) 昨夜聞こえた <u>暴風</u> <u>雨</u>(uuu) 落ちて散りゆく <u>花</u> <u>無数</u>(uuu)</p>	<p>訳詩③ 春の夜明けに <u>気が</u><u>つ</u> <u>かず</u>(uau) 庭で鳥鳴き <u>耳</u><u>澄ます</u>(uau) <u>い</u><u>く</u> <u>ばく</u>の花が <u>散</u>ったのか 夕べの風雨 <u>木々</u><u>揺らす</u>(uau)</p>
<p>【「静夜思」の訳詩】訳詩① 寢床に差し込む この月光 (ou) 霜のようだと <u>我</u><u>思</u>う(ou) <u>頭</u>挙げ て見た <u>山</u>の月思い出される <u>我</u>が <u>故郷</u>(ou)</p>	<p>訳詩② 寢室にさす 月 の<u>光</u>(iai) 地上の霜と <u>見</u>間違<u>い</u>(iai) 山の月見て 考える遠いふるさと <u>帰</u>りたい(iai)</p>	<p>訳詩③ 寢床明るく <u>眠</u>れ <u>ない</u>(eai) 月が作りし <u>銀</u>世界(eai) 見上げる我を <u>照</u>らし出す 里を思えど <u>戻</u>れない(eai)</p>
<p>【「送元二使安西」の訳詩】訳 詩① 朝雨降ったぜ <u>今</u>ここ渭城 (jyou) 柳の青は <u>最</u>高潮(iyou) 飲め飲め酒飲め <u>これ</u>友誼 (jyou) 君西旅立つ <u>それ</u>は今日 (iyou)</p>	<p>訳詩② 地面潤す 朝の<u>雨</u>(ae) 柳の緑 <u>綺</u>麗だ<u>ね</u>(ae) まだ終 わらない <u>飲</u>もう酒(ae) 友と 離れて <u>ゆ</u>く別<u>れ</u>(ae)</p>	<p>訳詩③ 朝降る雨で <u>濡</u>れる <u>塵</u>(ii) 青い柳 春は<u>四</u>季 (ii) 一杯の酒 <u>勸</u>めるよ君 <u>に</u>(ii) 行く先友の <u>い</u>ない <u>西</u>(ii)</p>

<p>【「春望」の訳詩】訳詩① このた た<u>かい</u> 何もに残らない(ai) 城の 草木 伸び放<u>題</u>(ai) 心を揺らす 花も<u>つらい</u>(ai) 別れを恨み 鳥も <u>つらい</u>(ai) 終わりのきざし 見 られない(ai) 家族の手紙 届か<u>ない</u>(ai) 頭を搔い たら 髪抜けてか<u>んざし</u>だ<u>って</u> さ<u>さら</u> <u>ない</u> (ai)</p>	<p>訳詩② 国壊され 残る山川 荒れた国にも 訪れた<u>春</u> (au) 花見て流す この涙 鳥の声聞き 心が<u>痛む</u>(au) 戦火 絶えない この数箇月 家族の手紙 届か<u>ず困る</u>(au) 白頭搔くたび 髪が落ち か<u>んざし</u>はもう さ<u>せ</u>なく<u>なる</u> (au)</p>	<p>訳詩③ もう山しかな<u>さそう</u> (sou) 草木だけう<u>るさそう</u>(sou) 花見ても泣き<u>そう</u>(sou) 鳥聞い ても泣き<u>そう</u>(sou) 手紙まだ来 な<u>さそう</u>(sou) のろしまだ<u>続き</u> <u>そう</u>(sou) ほんともう<u>売げ</u><u>そう</u> (sou) か<u>んざし</u>も不要<u>そう</u>(sou)</p>
--	--	---

## 4.2 グループインタビュー

今回の実践に関して取り組みやすかった点、取り組みづらかった点などの体験的感想や、この実践を高校の授業で行うとしたらどのような工夫や手立てが必要と思うかという探索的な意見について、実践参加者5人を対象としたグループインタビューの形式で収集した。このグループインタビューは、訳詩作成の翌週に行った「訳詩を読み合う学習」に引き続いて行い、読み合う学習における自由な雰囲気そのまま受け継ぐ形で実施した。また、このインタビューの内容は履修科目の成績には関わりがない点も伝えた。

参加者の回答を、学習評価の観点として用いられる「①知識・技能の習得と活用」、「②思考力・判断力・表現力の涵養」、「③主体的に学習に取り組む態度の喚起」という3項目に分類した。かつ、国語科教育法という授業の一環として行うにあたり聞き取った「④この実践を高校生を対象として行う場合の留意点」という項目を加え、表5に示した。

これらの回答から、本実践にはいかなる教育効果があったのかを考察してみたい。

①に関しては a や b の回答は韻を踏まない訳詩でも出得るものだが、c の回答には今回の課題の特徴が表れている。敢えて訳詩に韻を踏ませる作業を通じて得られた回答であり、本実践の教育効果の一端と言えるだろう。d についても、韻を踏んだ訳詩の創作のために紹介した支援辞書が派生的な効果を発揮したという点は本実践の教育効果と言えよう。

②に関しては、韻を踏んだ訳詩の創作によって「自分の訳を作ったという実感(a)」や、「言葉遊びの自由さや楽しさ(b)」が得られたということであり、韻を踏んだ訳詩の創作が主として表現力の涵養に結びついたと言える材料になり得る。(c)は、思考力や判断力が学習者自身の中でどのように機能したかを伺い知ることができる。

③に関しては、a の回答に見られるように、韻を踏んだ訳詩という今回の課題が今までに行われたことがないからこそ意欲が喚起されたというところに、本実践の教育効果が見られた。bからは、訳詩の例を事前に見せることと意欲喚起との関連を知ることができる。

④に関しては、今回の実践によって学習者はさまざまな実感を持ち、高校生を対象とした授業実践を想定した具体的な工夫のアイデアを出し合うことができた。

このように、グループインタビューの回答によって、他の形式の訳に比べて今回の韻を踏んだ訳詩の創作実践により大きな教育効果があるという考察を導くことができた。

表 5 グループインタビューの回答

<p>①「知識・技能の習得と活用」に関する回答</p> <p>a. 配られた訳詩以外にも現代語訳や時代背景を調べるうちに、情景のイメージが自分の中でできてきた。</p> <p>b. 何も調べずに自力で訳詩を作るのは無理なので、結局調べることになっている。課題は訳詩作りなのに、漢詩の知識も身に付くのはうまいやり方だと思う。</p> <p>c. 絶句の三行目（転句）で韻を踏まない理由が自分なりにわかった気がする。自分で韻を踏んだ訳を作ってみて、四行全てに韻を踏むのは却ってくどい感じがした。二回韻を踏んだら、ここで韻を踏まずに一呼吸置きたいという気持ちが分かるような気がした。これまでは「そういう決まりだから」とただ覚えるだけだったことが、実際に作ってみて実感できたというのは自分にとって大きかった。</p> <p>d. 支援辞書は必須だと思った。支援辞書を見るだけで知らない語に出会えたり、意味が分からない語を調べて知ることができたりするので、語彙を増やすのにも良いと思った。</p>
<p>②「思考力・判断力・表現力の涵養」に関する回答</p> <p>a. ただの現代語訳と違って、韻を踏むことに意識が向くので、教科書の現代語訳にとらわれずに原文から着想を得て自分の言葉で訳すことができた。自分の訳を作ったという実感がある。</p> <p>b. 原文の意味を全部入れ込むのではなく、意識でもいいというルールが前提にあることで、言葉遊びの自由さや楽しさをより感じられた。綺麗にびしっと韻を踏めた訳詩が完成したときは達成感があって気持ちよかった。</p> <p>c. 最初の一句目や二句目の最後のいくつかの文字の音を決めて、次の押韻に関連する言葉を支援辞書を使って探し、押韻の言葉が確定したらその前の言葉を決めていくという順でやると、思いの外スムーズに作ることができた。</p>
<p>③「主体的に学習に取り組む態度の喚起」に関する回答</p> <p>a. 訳詩の例をたくさん見てしまっていたので、同じ条件だったら却って作りづらいと思っていた。その点、今回は韻を踏むという新しい条件が加わっていたので真似にならず、誰も作ったことがないものを初めて作るということだったので、だったらやってみようという気になった。</p> <p>b. 韻を踏んだ訳詩って一体何だと思ったが、「学習者に示した訳詩例④（稿者が作成した訳詩）」を見て、こういうことかとすんなりわかった。</p>
<p>④「この実践を高校生を対象として行う場合の留意点」に関する回答</p> <p>【時間配分について】</p> <p>a. 国語科の教員志望の大学生だから70分で四つ作れたが、高校生ではかなりきついだろう。50分間では多くても二つではないか。</p> <p>b. 調べることに熱心になりすぎて訳詩を作る時間がなくなる子もいると思うので、調べる時間と自分の作業をする時間とを分けた方がいい。</p> <p>【学習形態について】</p> <p>c. 高校では、導入に、具体例ややり方の説明をする時間を十分に取って、生徒の意欲を喚起して、グループワークなどにして段階を踏んでいく方が取り組みやすいと思う。</p> <p>d. ずっとグループワークだと、自分が作りたいものが作れなくなる。だからといってこの作業をずっと一人でやるのはつらいと思う。だから、今回のように、時々グループワークになってみんなのものをを見せてもらって、また自分の作業に戻るといったのは、気分転換にもなってよかった。</p> <p>【知識の習得と創作活動との均衡について】</p> <p>e. この活動を授業に取り入れるならば、メインの漢詩の内容理解の授業は最小限にして、単元全体の時間数を増やさずにしたい。それでもこの活動から学べることも多いので、学習内容が少なくなることはないだろう。</p> <p>f. 内容理解の授業はなしにしてもいいと思う。漢詩の説明なんて熱心に聴く生徒は少ないと思うし、自分で調べればそれが内容理解になる。</p> <p>g. 何も調べずに感覚だけで作ってしまう子もいる。そういう子は内容理解をせずに終わってしまう。そのために、 「これだけは知っておこう」というようなプリントを一枚配ったらいい。</p> <p>h. 訳詩を四つ作るというのは嫌になってしまうと思う。分担制にして一つは必ず作るとかしたらどうか。</p> <p>i. 一つしか作らないのではあまり学習の深まりにならないと思うので、二つは作らせたい。</p>



これらの回答から、本実践にはいかなる教育効果があったのかを考察してみたい。

①に関しては a や b の回答は韻を踏まない訳詩でも出得るものだが、c の回答には今回の課題の特徴が表れている。敢えて訳詩に韻を踏ませる作業を通じて得られた回答であり、本実践の教育効果の一端と言えるだろう。d についても、韻を踏んだ訳詩の創作のために紹介した支援辞書が派生的な効果を発揮したという点は本実践の教育効果と言えよう。

②に関しては、韻を踏んだ訳詩の創作によって「自分の訳を作ったという実感(a)」や、「言葉遊びの自由さや楽しさ(b)」が得られたということであり、韻を踏んだ訳詩の創作が主として表現力の涵養に結びついたと言える材料になり得る。(c)は、思考力や判断力が学習者自身の中でどのように機能したかを伺い知ることができる。

③に関しては、a の回答に見られるように、韻を踏んだ訳詩という今回の課題が今までに行われたことがないからこそ意欲が喚起されたというところに、本実践の教育効果が見られた。bからは、訳詩の例を事前に見せることと意欲喚起との関連を知ることができる。

④に関しては、今回の実践によって学習者はさまざまな実感を持ち、高校生を対象とした授業実践を想定した具体的な工夫のアイデアを出し合うことができた。

このように、グループインタビューの回答によって、他の形式の訳に比べて今回の韻を踏んだ訳詩の創作実践により大きな教育効果があるという考察を導くことができた。

## 5. 本実践の成果と課題

今回の実践の成果として、次の二点を挙げておきたい。

第一に、漢詩について複数の訳詩を収集することができたという点である。漢詩の訳詩創作の課題は、長年にわたって高等学校国語教科書に載っていたものの、俳人、詩人、作家、研究者以外の訳詩は、これまでに指導書でも実践報告でも見るができなかった。今回の実践によって、これまでに知ることができなかった学習者による実作例を収集することができたことは貴重な資料となり、今後の実践に活きるものとなる。かつ、今回は脚韻を踏んだ韻文訳という、高校教科書に掲載された課題よりも難易度の高い作業に学習者は取り組み、ルール通りの作品を作り上げた。教科書通りの課題では飽き足らず、発展的な課題に挑戦してみたい学習者にとっても十分な手がかりとなり得る。今回の実践は、高校生と大学生の違いはあるものの、漢詩に関する知識は高校の授業レベルの内容を一通り学んだ程度の学習者が初めて作るという点では大差はない。

第二に、訳詩の創作にあたっての体験的感想をインタビューによって収集することができた点である。先例のない授業を実践することは、学習者が感じる学習内容の難易度や作業にかかる時間などの負担感、学びの実感、学びの楽しさなどについては推測のもとで行うしかなく、その推測が外れてしまった場合はその後の学習意欲を減退させてしまいかねない。その点、今回の実践は今回は大学生を対象に模擬授業という形で行い、訳詩の作成に至るまでの過程や作成の工夫、また、この実践を高校生を対象として行う場合の留意点をインタビューによって収集することが

できた。これらのものも今日まで明らかになったことはなく、本実践を高校の国語科授業で実践するにあたっての貴重な資料となる。

最後に今後の課題を挙げておきたい。今回の実践によって、中学校と高等学校、もしくは小・中・高の学校種を跨いで採択されている漢詩教材について、高校段階で、学習者を充実した学びに誘う授業実践の一端を示すことができた。その上での課題ということになる。

「高校の必修科目から古典はなくすべき」という論（勝又，2019，p.3）や、「古文・漢文より国語リテラシーを」という論（勝又，2019，p.37）がシンポジウムで大きな賛同を受けるような状況の中で、大学受験科目だからということではなく、二回目、三回目に出会う教材であったとしても「この授業は受ける価値がある」という学習者の実感を獲得できるような充実した学びを提供するような授業を展開することを常に考えていきたい。

## 註

1) 東京書籍教科書では、『新編言語文化』、『精選言語文化』の2種類のそれぞれの漢詩の章の末尾に、「訳詩を書く」という言語活動のページがある。「春暁」の3つの訳詩（井伏鱒二訳，前野直彬訳，土岐善麿訳）を載せ、「①「春暁」の三つの訳詩を読み比べ、それぞれの詩の表現上の特徴について気付いたことを話し合おう。②三つの訳詩を参考に、自分でも好きな唐詩を選んで訳詩を作ろう。」という次の2つの課題を提示している。（嶋中ら，2021a，p.235；嶋中ら，2021b，p.262）

筑摩書房『言語文化』では、漢詩の章末に「実践」として「翻案を通して、自分の思いを伝えよう」という言語活動のページがある。「春暁」の三つの訳詩（井伏訳，土岐訳）を載せ、「このような、訳そのものが一つの作品として独立するように、原作を生かしつつ改作することが『翻案』である」という説明がある。その上で、「翻案詩を創作しよう」という、次の6つの課程からなる活動例を提示している。「①教科書の中から、唐詩を一首選択する。②レッスンの内容を参考に、選択した詩を翻案しよう。③数人のグループを作り、お互いの翻案を読み合おう。④グループ内で、自分が翻案に込めた思いを原詩を踏まえて説明しよう。⑤翻案創作を通して、原詩の鑑賞に関し深まった点を、各自でまとめる。⑥クラスで翻案詩集を作ってみよう。」（安藤ら，2021）

2) 類するものとして、木村（1999）を見るのみである。しかしこの論考は、日本詩の押韻を主たるテーマとしており、訳詩作りの学習活動に関する言及はない。

3) 明治書院『漢文古典乙Ⅰ』指導書には土岐の訳詩と教科書編者である内田の訳詩（内田ら，1963b），好学社『高等学校古典乙Ⅰ漢文編』指導書には土岐の訳詩（加藤ら，1968b）が掲載されている。それ以外は全て「解答略」と記されている。

4) 一方で、漢詩の訳詩作りそのものは俳人，詩人，作家，研究者などによって広く多く行われている。そのおおよそを挙げてみただけでも、芭蕉の門人である森川許六『和訓三体詩』

（1714），仮名論者の中村春二『唐詩選ぬきほ』（1922），ローマ字論者の土岐善麿『UGUISU no

TAMAGO』(1925), 佐藤春夫『車塵集』(1929), その続編ともいえる『玉笛譜』(1948), 佐藤一英『新韻律詩抄』(1935), 井伏鱒二『厄除け詩集』(1937), 那珂秀穂『支那歴朝閨秀詩集』(1947), 日夏耿之介『唐山感情集』(1959), 目加田誠『唐詩三百首』(1975), 武部利男『白樂天詩集』(1981)などを連ねることができる。また, 近年でも, 松下緑『「サヨナラ」ダケガ人生カ』(2003), 松下緑『七五調で味わう人生の漢詩』(2009), 横山悠太『唐詩和訓』(2019)などが出版されている。ここに挙げたような, 近現代における漢詩の訳詩の概要把握を試みた論考として, 嘉瀬達男(2015)がある。

## 引用文献

- 安藤 宏ら (2021) 『言語文化』筑摩書房, 187-188.
- 井伏鱒二 (1994) 『厄除け詩集』講談社, 1-168.
- 嘉瀬達男 (2015) 「近現代における漢詩和訳について—詩人, 詞人, 歌人と学者—」, 『小樽商科大学人文研究』 第 130 号, 256-218(1-39).
- 加藤常賢ら (1968a) 『高等学校古典乙 I 漢文編』 好学社, 31-36.
- 加藤常賢ら (1968b) 『高等学校古典乙 I 漢文編教授資料』 好学社, 71.
- 勝又 基 (2019) 『古典は本当に必要なのか, 否定論者と議論して本気で考えてみた。』 文化通信, 1-220.
- 木村哲也 (1999) 「体験的口語押韻定型論—漢詩和訳を題材に一」, 『語学文学』 第 37 号, 31-39. 松下 緑 (2006) 『漢詩に遊ぶ 読んで楽しい七五訳』 集英社, 1-256. 松下 緑 (2009) 『七五調で味わう人生の漢詩』 亜紀書房, 1-221.
- 野浪正隆 (2006) 「ラップ作詞支援辞書」 Retrieved from [http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~nonami/text/rap\\_helpdic.lzh](http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~nonami/text/rap_helpdic.lzh) (2021 年 11 月 20 日)
- 三省堂 (2021) 「令和 3 年度版 現代の国語 年間学習指導計画例」 Retrieved from [https://tb.sanseido-publ.co.jp/03gkpr/documents/document\\_pdf/03gk\\_curric\\_2b.pdf](https://tb.sanseido-publ.co.jp/03gkpr/documents/document_pdf/03gk_curric_2b.pdf) (2021 年 11 月 20 日) 嶋中道則ら (2021a) 『新編言語文化』 東京書籍, 235. 嶋中道則ら (2021b) 『精選言語文化』 東京書籍, 262.
- 東京書籍 (2020) 「令和 2 年度小学校国語科用「新しい国語」年間指導計画作成資料 (6 年)」 Retrieved from [https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/data/kokugo\\_keikaku\\_s\\_6\\_20200716.pdf](https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/data/kokugo_keikaku_s_6_20200716.pdf) (2021 年 11 月 20 日) 土岐善麿 (1985) 『鶯の卵 新訳中国詩選』 筑摩書房, 3. 内田泉之助ら (1963a) 『漢文古典乙 I』 明治書院, 32-37. 内田泉之助ら (1963b) 『漢文指導資料古典乙 I』 明治書院, 73. 柳田国男ら (1954) 『国語 高等学校二年下』 東京書籍, 18-21.
- 横山悠太 (2019) 『唐詩和訓』 大修館書店, 1-231.

